

昔むかし、三羽の小さなメンドリがいました。白いメンドリと黒いメンドリと赤いメンドリです。あるとき、三羽の小さなメンドリは、お父さんとお母さんに家を追い出されてしまいました。

「いったい、どうしたらいいんでしょう」

小さなメンドリたちは、さんざん泣きました。それから、相談して、冒険に出かけることにしました。

「ずんずん、ずんずん、歩いて行くと、石がいつぱい落ちていました。」

「この石で、小さな小屋を建てましょう」

三羽の小さなメンドリはそういって、小さな小屋を建てました。すると、赤い小さなメンドリが、小屋に入っていました。

「戸がちゃんと閉まるかどうか、みてみましょう」

そして、戸を閉めて、中から鍵をかけてしまいました。黒い小さなメンドリと白い小さなメンドリは、小屋に入れません。しかたがないので、先へ歩いて行きました。

しばらく行くと、また、石がいつぱい落ちていました。

「この石で、小さな小屋を建てましょう」

二羽の小さなメンドリは、小さな小屋を建てました。すると、黒い小さなメンドリが、小屋に入っていました。

「戸がちゃんと閉まるかどうか、みてみましょう」

そして、中から鍵をかけてしまいました。

かわいそうに、白い小さなメンドリは、泣きながら歩いて行きました。一生けんめい歩いて行きましたが、何も見つかりません。やがて、夜になりました。

「いったい、どうしたらいいんでしょう」

そのとき、とてもきれいな女の人があらわれて、いいました。

「そこで何をしているの、かわいいおちびちゃん。どうして泣いているの」

その女の人は、マリアさまでした。白い小さなメンドリは、マリアさまにいいました。

「あたしたち、三羽の小さなメンドリは、お父さんとお母さんに捨てられました。私たちは、小屋に入らず。それで、みんなで冒険に出て、石の小屋を作ったんだけど、あたしは、小屋に入

れてもらえなかったんです」

マリアさまはそれを聞くと、いいました。

「泣くことはないわ。あなたには、もっとずっとすてきな小屋が手に入るから。でも、おおかみだけは気をつけるのよ。いくら戸をたたいても、開けてはだめですよ。食べられてしまいますよ」

そういうと、マリアさまは消きえました。そして、そのあとに、すてきな館やかたが建たっていました。白い小さなメンドリは、その館で暮くらし始めました。

まもなく、おおかみが、赤い小さなメンドリの小屋にやって来て、戸をたたいていいました。

「開けておくれ」

赤い小さなメンドリは答えました。

「だめ、だめ、だめ。あんたはおおかみでしょ。あたしを食べるつもりでしょう」すると、おおかみはいいました。

「それなら、タンとふんで、トンとふんで、小屋をこわしてやるさ」
小さな赤いメンドリは、いいました。

「あんたが、タンとふんで、トンとふんでも、小屋はこわれないわ」

そこで、おおかみが、タンとふんで、トンとふむと、小屋はこわれました。おおかみは、赤い小さなメンドリを食べてしまいました。

それから、おおかみは、黒い小さなメンドリの小屋に行つて、戸をたたいていいました。

「開けておくれ」

「だめ、だめ、だめ。あんたはおおかみでしょ。あたしを食べるつもりでしょう」

「それなら、タンとふんで、トンとふんで、小屋をこわしてやるさ」

「あんたが、タンとふんで、トンとふんでも、小屋はこわれないわ」

そこで、おおかみが、タンとふんで、トンとふむと、小屋はこわれました。おおかみは、黒い小さなメンドリを食べてしまいました。

それから、おおかみは、白い小さなメンドリの館に行つて、戸をたたいていいました。

「開けておくれ」

「だめ、だめ、だめ。あんたはおおかみでしょ。あたしを食べるつもりでしょう」

「それなら、タンとふんで、トンとふんで、館をこわしてやるさ」

「あんたが、タンとふんで、トンとふんでも、館はこわれないわ」

そこで、おおかみは、タンとふんで、トンとふみましたが、館はこわれません。おおかみは、いつまでも、タンとふんで、トンとふんでいましたが、くたびれて、とうとうくたばってしまいましたとき。

オンドリがないたぞ

おしゃべりは おしまいだ

村上郁再話

資料『フランス民話の世界』樋口淳・樋口仁枝編訳／白水社